様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１２６０８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７６０５１７

研究課題名（和文）女性の生活空間としての江戸城本丸御殿大奥および大名屋敷にみる空間構成の実態と変遷

研究課題名（英文）The evolution and the spatial hierarchy of the principal section, in the women's quarters of Edo castle and Daimyo's residence during the Edo period

研究代表者
服部　佐智子（HATTORI, SACHIKO）

東京工業大学・大学院総合理工学研究科（研究院）・東工大特別研究員

研究者番号：２０６１４１２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、江戸城本丸御殿大奥の比較対象として、大名屋敷の一典型である金沢城二の丸御殿及び加賀藩江戸上屋敷を取り上げ、部屋構成、付属する設備空間、室内意匠から空間構成を検討してきた。その結果、金沢城二の丸御殿や加賀藩江戸上屋敷の空間構成から、江戸城本丸御殿大奥や大名に入輿した将軍の娘の居住空間を含め、将軍家の女性の住まいと大名家の女性の住まいにおいて、女性の生活空間に対する計画理念の違いの一端を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This paper aims to clarify the evolution and the spatial hierarchy of the principal section, in the women's quarters of Edo castle and Daimyo's residence during the Edo period, by verifying the historical evidence acquired mainly from the diversified contemporary drawings. As a result, there was a common point; the living room was maintained to conclude life at the outskirts, between the residence for the feudal lord’s mother in Kanazawa castle and the residence for the feudal lord’s family in daimyo’s main Hongo mansion of the Kaga feudal clan.

研究分野：工学

キーワード：大名屋敷　奥向　御守殿

１．研究開始当初の背景

申請者はこれまで、近世の上層武家住宅における女性の生活空間について研究を進めている。その中で、近世の上層武家住宅における女性の生活空間という観点から、江戸城本丸御殿大奥の空間的変遷と実態を明らかにすることを目的とした日本住宅史研究を進め、博士号を取得した。従来の近世武家住宅に関する研究では、対面・接客を主な機能とする男性の公的な空間を中心に行われ、公の場に登場しない女性や家族の生活空間に関しては等閑視される傾向にあった（平井聖『SD 選書日本の近世住宅』鹿島研究所出版会,1968）。近世の武家住宅の研究においては、対面・接客という視点から、様々な研究がなされてきたが、対面・接客や執務に供される公的空間は男性によって主に使用され、その意味では、近世の住宅史研究は、男性の生活空間を中心に編成されてきたといえる。しかし、これまでの武家住宅の研究動向において、公的な場に登場しない大多数の女性の生活や、その屋敷の主君が家族と共に過ごす生活空間は、家族という概念を近世と現代とで同義に論じることはできないにしても、充分に検討されてきたとは言い難い。また一方で、近世の婚姻制度においては、武家へ嫁ぐ公家の女性達により、文化的に優位にある公家の文化が徐々に武家の女性達にもたらされ、女性が政治的役割を担わない反面、文化に対しては影響を与える担い手として擡頭したとも指摘されている（山本博文『徳川将軍家の結婚』，文春新書,2005)。

殿舎の具体的な機能を検討した近世武家住宅の既往研究の中で、女性の生活空間を取り扱ったものとして、藤原恵子らの庄内藩江戸屋敷と庄内藩鶴ヶ岡城本丸御殿の奥向に関する研究が挙げられるが、殿舎の平面構成から、機能分化のありかたを検討したもので、御殿を構成する各部が実際どのように使用されたかは扱われていない（藤原恵子，永井康雄，飯淵康一，岡田悟「近世大名居館の奥向き殿舎の構成について ：庄内藩を事例として」(『日本建築学会東北支部研究報告集.計画系』,No.68,2005,pp.175-182))。さらに、江戸城本丸御殿大奥おける室内意匠については、小粥祐子氏の一連の研究が挙げられる（小粥祐子「幕末期における江戸城本丸御殿大奥松御殿の室内意匠について」（日本建築学会『日本建築学会学術講演梗概集』,2008,pp.59-60)、「万延度江戸城本丸御殿大奥に用いられた唐紙の色について」（同書,2009,pp.467-468））。これらは本研究に重要な示唆を与えるものであるが、検討された殿舎は江戸城本丸御殿大奥の一部の殿舎に留まっており、唐紙に特化して検討されていることから、室内意匠の総合的な検討、さらに空間と生活の実態との関係は明らかにされているとは言えない。このように、女性達の生活と建築空間との関係に着目したものは見受けられず、その概要は判明しているものの、具体性をもって穿鑿されているとは言えない。

申請者は上記の問題点を踏まえ、国内にある江戸城本丸御殿大奥に関する多数の絵図を悉皆的に検討し、近世の上層武家住宅の一典型である江戸城本丸御殿大奥御殿向について、女性の生活空間という観点から、その変遷と実態を各種の絵図史料や文献資史料の分析を通して、各殿舎は、将軍と将軍家族が共に一定の時間を過ごすことのできるように、経年的に空間の設えを整備していったことを実証した。このように、殿舎構成、付属する設備空間、室内意匠、実態の検討から、これまで見いだされなかった江戸城本丸御殿大奥御殿向の空間構成について、明らかにしてきた。

２．研究の目的

本研究は、これまで申請者が取り組んできた江戸城本丸御殿大奥の住宅史研究をより深化させ、近世の上層武家住宅として江戸城本丸御殿大奥に加え大名屋敷における女性の生活空間に注目し、空間的変遷と実態の分析を通じて、日本住宅史における女性の生活空間の住宅様式の一端を明らかにする。

本研究は殿舎構成、設備空間、室内意匠、使用実態を包括的に捉えるため、これまで出来ていない空間構成を評価する指標として設備空間や室内意匠の検討を導入している。特に、この設備空間や室内意匠への着眼点は、使用する者の性別や身分を示す一指標となり、殿舎構成や殿舎平面からは把握できない生活の在り方や生活観・社会通念の変化を捉えられる。すなわち、建築的形態による空間構成に留まらず、上記のような検討を通して定義付けられる空間がどのように織り成されるかを明らかにできる新たな研究手法を提示する。その手法を、旗本屋敷や公家住宅にも適用することで、既往の近世住宅史の刷新を可能とし、その学術的意義は高い。加えて、女性の生活空間の殿舎構成、設備空間、室内意匠、使用実態を包括的に検討する本研究は、従来、男性の生活空間に付属する空間として、曖昧な印象論で語られてきた女性の生活空間の解明に資するものであり、今後の建築史研究の領域を拡げる意義をもつ。したがって、男性の生活空間に付属する空間として、曖昧な印象論で語られてきた女性の生活空間を取り上げることにより、近世武家住宅に対する新たな知見を提出でき、今後の議論を深化させるための土台を築けると考える。

３．研究の方法

江戸の土地構成は、武家地・町地・寺社地の 3 種類からなり、江戸の武家地の総面積は 1169 万 2591 坪（明治 2 年（1869）調査）で、全市街の約 68%を占めた。その武家地の面積の約半分は大名屋敷でその数は約 600 にのぼった。中でも加賀藩は江戸時代徳川支配の諸大名の中で最大の所領と高い文化を

誇り、江戸時代を通じて幾多の屋敷が度々造営された。このようなことから、これまで推進してきた江戸城本丸御殿大奥と同様に経年的な検討が可能な上に、これまでの研究において、見出された、設備空間・室内意匠・実態から空間構成を包括的に捉える手法で検討することが可能であると考えられる。

そこで、本研究では、江戸城本丸御殿大奥と加賀藩江戸藩邸について、これまでの研究成果に加えて、新たに日本および外国に所蔵されている各種絵図史料や文献史料を収集し、それらを基に分析を行った。

１）加賀藩江戸藩邸の奥向きについて、収集した史料を基に、主として殿舎構成、各殿舎の配置、設備空間の仕様や変遷、室内意匠、使用実態などの検討項目について分析を行う。

２）江戸城本丸御殿大奥について、これまでに収集した絵図史料や文献史料を拡充するために、新たに外国で収集した史料についてこれまでの研究成果と照らし合わせながら、適宜必要な分析を行う。

３）加賀藩江戸藩邸の奥向きと江戸城本丸御殿大奥、それぞれの結果を統合し、近世上層武家住宅における女性の生活空間の実態とその変遷について明らかにする。

４．研究成果

（1）金沢城二の丸御殿における女性の生活空間

江戸城本丸御殿大奥との比較を検討する前段階として、金沢城二の丸御殿の女性の生活空間の変遷について整理した。金沢城の築城当初は、本丸御殿が藩政の場であったが、慶長 7 年（1603）、元和 6 年（1620）、寛永 8 年（1631）の 3 度の本丸御殿の焼失により、それまで本丸御殿が持っていた機能が新たに造営された二の丸御殿に移され、金沢城の中心となった。二の丸御殿はその機能から接客や儀式を行う「御表廻り」、藩主の日常生活、政務を行う「御居間廻り」、女性の生活空間である「御広式廻り」に分類される。さらに、御広式廻りは、一部の正室、側室、子女の住む御広式と女中の住む部屋方に分類される。そこで、まず上層武家住宅の女性の生活空間として、金沢城二の丸御殿御広式廻りを取り上げ、各種の絵図史料を経年的に分析し、女性の生活空間の部屋構成の特質をみた。今回の調査で、悉皆的に収集した金沢城二の丸御殿御広式廻りに関する絵図の中から、殿舎構成や部屋構成に違いがみられる絵図を分析対象絵図として取り上げ検討を行った。

絵図①金沢城ニ之丸座舗之図元
絵図②金沢城図二ノ御丸御家廻り并御広式
絵図③宝暦年中二之御丸御殿地指図
絵図④文化焼失以前二の丸之図
絵図⑤二ノ丸御殿并御広式御絵図
絵図⑥金沢二之丸御殿図
絵図⑦金沢城二ノ丸絵図面
絵図⑧金沢城二ノ丸御殿之図

検討の結果、金沢城二の丸御殿御広式廻りは側室や子女のいる御広式と女中の住まいである部屋方に分類できるが、部屋方の部屋構成、規模に大きな変動はなく、御広式廻りの経年変化は御広式の経年変化に起因するものと捉えられる。御広式の部屋構成をみてみると、各時代において一貫して設けられている御対面所、御次、御居間、御膳仕立所、御末は御広式が御広式として機能する上で、必要不可欠な部屋であったと捉えられた。中でも、御対面所は、時代に下るに従い、規模が大きくなり、上段が整備され、一方、御居間は部屋の数が増え、それに伴う女中の役務空間の増加で、拡充化された。すなわち、御広式の部屋構成には、公的空間における格式の整備、私的空間の拡充が徐々に形成されてゆく過程を窺えた。

（２）金沢城二の丸御殿御広式廻りにおける御居間の用例よる検討

上記の検討から、金沢城二の丸御殿御広式廻りにおいて、御広式の経年変化が御広式廻りの変化の主要因であったことが認められた。中でも、御居間は、各時代において御広式に一貫して設けられている部屋の一つであり、御広式の部屋構成として必要不可欠な部屋の一つであったと考えられる。また御居間には、当初は続きの間がなく、御居間一間で構成されていたのに対し、天明 7（1787）年の改築以降、御居間に続き間である御次が設けられるようになり、文化 5- 7（1808-10）年の再建以降、御居間と御次という組合せが御広式内に 2 組設けられるようになった。さらに江戸後期になると、この続き間の組合せが 3 組設けられるようになる。そこで、御居間の使われ方から金沢城二の丸御殿御広式廻りにおける計画理念の一端を明らかにすることを試みた。

検討の結果、金沢城二の丸御殿御広式廻りにおいては、時代に降りに従い、御居間の数が増えることで、御広式の部屋構成が拡充化されたのに対し、御居間の近傍に設けられた御湯殿は一貫して１箇所のみであった。この御居間の住まい手が藩主の生母であるかどうかにより、部屋の格式や設備に格差が設けられた。このように御居間を複数設けることで、住まい手の身分により、御広式は臨機応変に対応し得るように整備されたと考えられる。すなわち、参勤交代により江戸屋敷に住んでいる正室に代わり、国許での女性達の頂点として藩主の生母を位置付け、生母の生活の場である御居間を主軸として、金沢城二の丸御殿御広式廻りは計画されていたと捉えられた。

御居間の室内意匠

	天井	壁	床	釘隠
御居間（北）	二重天井　御天井　金浮仙菊	ヲカラカミ　ツルノエ アリカヘ　スナゴ	二重ユカ	五七ノキリ
御次	二重天井　御天井　金浮仙菊	ヲハリツケ　ツルノヲエ		五七ノキリ
御居間（南）	板御天井	ヲハリ付　白地キフン		亀甲形
御次	板御天井	ヲハリ付　白地キフン		シホウ
御居間（西）		ヲカラカミ		

（３）加賀藩本郷上屋敷の女性の生活空間

国許にある金沢城二の丸御殿に対して、もう一つの女性の生活空間である、参勤交代により正室の居住空間となった加賀藩本郷上屋敷を取り上げる。加賀藩本郷上屋敷では、女性の生活空間として、藩主の家族や女中の居住空間である「御本宅」の他に、将軍の娘が大名に入輿する場合に建設された、将軍の娘の居住空間「御守殿」がある。加賀藩本郷上屋敷の「御守殿」には、6 代藩主吉徳に嫁した松姫（徳川綱吉養女）の住まい及び 13 代藩主斉泰に嫁した溶姫（徳川家斉女）の住まいがある。このような「御守殿」は婚儀すべき命を受け建設され、姫の逝去に伴い撤去されたことから、「御守殿」が将軍の娘の住まいという限定された用途で建築されたことが認められ、「御守殿」と「御本宅」は住まい手による空間構成の違いをもたらした可能性が考えられる。そこで、加賀藩本郷上屋敷を対象として、「御守殿」及び「御本宅」を女性の生活空間として捉え、その計画理念の一端を明らかにすることを試みた。

検討の結果、加賀藩本郷上屋敷において、「御守殿」及び「御本宅」は格式の整備された対面・接客空間、及び複数の私的空間から構成されていた。但し「御守殿」は姫の逝去に伴い撤去されたにも関わらず、「御本宅」に比べ格式の高い座敷飾や室内意匠を備え、複数の部屋を用途ごとに使い分け、一定の規範の基に建てられていたと考えられるのに対し、「御本宅」では「御居間」と別に「御寝所」・「御化粧ノ間」が計画されているものの、「御居間」で日常生活が送れるよう床飾・棚飾が整備されており、「御居間」で寝食を初めとしてその周辺で生活を完結できるよう整備された金沢城二の丸御殿御広式に近い構成であったといえる。

「御守殿」及び「御本宅」における部屋構成

宝永5年〔1708〕-享保5年〔1720〕	文政8年〔1825〕	文政10年〔1827〕-天保3年〔1832〕
「御守殿」		「御本宅」
御上段･御次下段	御対面所 御上段･御下段	御対面所･御次･御納戸･鷹ノ間･次
御二之間･御三之間･御帳台	二之御間･御納戸･渡り之御間	御居間･二ノ御間
御休息間 御上段･御次下段	右御座之間･二之御間	南御居間･御次･〔御部屋〕･御次
〔御休息間 二間〕	左御座之間･二之御間	御化粧ノ間
御寝間 上段･御寝間 上段･御下段	温り之御間･御次･御三之間･御台子	御寝所
御小座敷	御休息之間･御次	御寝所･御次
御化粧之間 御上段･御次下段	御小座敷･御次	御納戸
御座敷	御寝所	御佛間
御納戸	御化粧之間	
御鈴廊下溜り	御納戸･御次	

「御守殿」及び「御本宅」における座敷飾

宝永5年〔1708〕-享保5年〔1720〕		文政8年〔1825〕		文政10年〔1827〕-天保3年〔1832〕	
「御守殿」				「御本宅」	
御上段	床･棚･納戸構	御対面所 御上段	床･棚･付書院･納戸構	御対面所	床･棚･付書院
二之間	床	御休息之間	床･棚･付書院	御居間	床･棚･付書院
御休息間 御上段	床･棚･付書院	右御座之間	床･棚･付書院	南御居間	床･棚
同御次下段	床	左御座之間	床･棚･付書院	〔部屋〕	床･棚
御化粧之間 御上段	床･棚	御寝所	床･棚･付書院	御寝所	床･棚
御寝間 上段	床･棚	御小座敷	床･棚･付書院	御寝所	床･棚
御寝間 上段	床	御化粧之間	床･棚･付書院		

文政期「御守殿」及び「御本宅」における各部屋の床飾・棚飾

	部屋名	床飾･棚飾
御守殿	御対面所 御上段	〔床〕御掛物三幅対 水引 蓬莱御台 置鳥･置鯉 御長熨斗三方 御瓶子三方 御敷絹 御銚子 御提子
	御休息之間	〔床〕御掛物三幅対 御厨子 御黒棚
	右御座之間	〔床〕御掛物三幅対 御弓 御纂目 御貝桶
	御寝所	〔床〕御掛物三幅対 御銚子 鶴鴛御台 御押稲穂 御下捨土器 御提子 〔棚〕御筒守
	御小座敷	〔床〕御掛物二幅対 御長刀 御太刀箱 〔棚〕御挟箱
	御化粧之間	**〔床〕御掛物二幅対 犬張子 天児這子 猿絹張 鳥子餅 御引渡（五三二** 御本膳 同二之膳 同三之膳 御盃 御銚子 御提子〕 御菓子
御本宅	御対面所	〔床〕御掛物三幅対 水引 蓬莱御台 燭台 置鳥･置鯉 御長熨斗三方 御瓶子三方 御敷絹 御銚子 御提子 〔付書院〕 御硯箱･鋪紙･銀鋼蓋御香炉
	御寝所	〔床〕御掛物二幅対 御銚子 鶴鴛御台 御押 御下捨土器 御提子 御提子 〔棚〕御筒守
	南御居間	〔床〕御掛物三幅対 砂物 御刀 御脇差 御刀掛 〔棚〕御食籠 御香炉 御見台 御貝桶 〔付書院〕御硯箱･御料紙箱･御文台

以上、金沢城二の丸御殿や加賀藩江戸上屋敷の空間構成から鑑みると、江戸城本丸御殿大奥や大名に入輿した将軍の娘の居住空間を含め将軍家の女性の住まいと大名家の女性の住まいでは、女性の生活空間に対する計画理念の違いが浮かび上がった。

これまでの研究により、加賀藩では「御守殿」は婚儀すべき命を受け建設され、姫の逝去に伴い撤去されたことから、「御守殿」が将軍の娘の住まいという限定された用途で建築されたことを鑑みると、「御守殿」と大名家の女性の住まいは住まい手による空間構成の違いをもたらした可能性が考えられる。

そこで、今後の展望としては、これまで申請者が取り組んできた江戸城本丸御殿大奥加賀藩の大名屋敷の女性の生活空間における住宅史研究をより深化させ、将軍家の女性の住まいと大名家の女性の住まいの実態を対比しながら分析することで、日本住宅史における女性の生活空間の住宅様式の一端を解明していく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

（1）服部佐智子「カリフォルニア大学ロザンゼルス校所蔵江戸城関連絵図について」『2015 年度日本建築学会学術講演梗概集』pp.211-212、2015 年 9 月　査読無

（2）服部佐智子「加賀藩本郷上屋敷における「御守殿」の実態について－６代藩主前田吉徳正室・松姫の事例をもとに－」『平成 27 年度日本建築学会近畿支部研究発表会』pp.685-688、2015 年 6 月　査読無

（3）服部佐智子「加賀藩本郷上屋敷の女性の生活空間における計画の理念」『2014 年度日本建築学会学術講演梗概集』、pp.51-52、2014 年 9 月 査読無
http://ci.nii.ac.jp/els/110009852939.pdf?id=ART0010369511&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1466013329&cp=

（4）服部佐智子「御居間の用例にみる金沢城二の丸御殿御広式廻りにおける計画の理念」『2013 年度日本建築学会学術講演梗概集』、pp.311-312、2013 年 8 月 査読無
http://ci.nii.ac.jp/els/110009677567.pdf?id=ART0010159313&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1466013412&cp=

（5）服部佐智子「金沢城二の丸御殿御広式廻りにおける部屋構成と変遷」『2012 年度日本建築学会関東支部研究報告集』、pp.673-676、2013 年 3 月 査読無
http://ci.nii.ac.jp/els/110009770015.pdf?id=ART0010265272&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1466013507&cp=

６．研究組織
(1)研究代表者
服部　佐智子（HATTORI SACHIKO）
東京工業大学　大学院総合理工学研究科
東工大特別研究員
研究者番号：20614126